

## 一般病棟において看取りにかかわる 卒後1年目看護師の死生観の様相

間宮みどり（基礎看護学）

【キーワード】 卒後1年目看護師，看取り，終末期ケア，死生観，様相，内観

本研究の目的は、一般病棟において看取りにかかわる卒後1年目看護師の死生観の様相を明らかにし、看護基礎教育における死生観の育成に関する教育方法上の示唆を得ることである。

研究デザインは、半構造化面接法による質的帰納的研究である。研究対象は、看護師3年課程の修了者で、A県内・外の中核医療施設の一般病棟において、看取りを体験した卒後1年目看護師の内、対象者の所属する医療機関の施設長及び看護管理者からの同意と紹介を経て、研究参加の同意を得た10名である。

データ収集（期間；2018年12月～2019年3月）は、インタビューガイドを用いて半構造化面接法で実施した。インタビュー内容から逐語録を作成し記述データとした。

分析方法は、記述データより対象者が死生観について自己の考えを語っている文脈を抽出しコード化を行い、内容の共通性・相異性を比較・照合して抽象化を進め、カテゴリー化を行った。

分析の結果、死生観の語りから、215のコード、33のサブカテゴリーを抽出し、次の12のカテゴリー、＜死に対し現実感のなさ＞、＜直面する死からの逃避＞、＜未知なる体験に対し無力感を持つ＞、＜看取りを契機として省察が深まる＞、＜看取りを契機として使命感が高まる＞、＜自己の看護観が深まる＞、＜自己の死生観を再考する＞、＜家族の存在や時間の尊さを実感する＞、＜患者と家族の心のありように共感する＞、＜自己の死生観との違いに戸惑う＞、＜尊厳ある死を願う＞、＜存在意義を追求する＞を得た。さらに、研究の目的に則し各カテゴリーの間の関連性について分析した結果、コアカテゴリーは、次の、「受け入れられない死」、「省察による内観」、

「人間の一生や存在への洞察」から構成された。

一般病棟において看取りにかかわる1年目看護師は、「受け入れられない死」という状況がある一方、看取りの体験に対峙し、生死に対する根源的な問いを繰り返しながら、人間の死にかかわる責任の重さを実感し、「省察による内観」を行っていた。内観により、自己の生死に対する価値観が変化することを通して、「人間の一生や存在への洞察」を深めていた。死生観及び看護観が高まっている様相を、1年目看護師の死生観の様相として可視化することができた。

省察による自己を内観する力を育むことの重要性が明らかとなり、特に、現実的な死に対して、「受け入れられない死」の状況にあるかを見極め、早期に、個々に応じて省察による内観を深めるかかわりが重要である。看護基礎教育においては、看護学生が自己のありようを俯瞰し、看護や死に対する捉え方や考え方についての自己理解が深まるように意味づけすることを助け、承認的な関わりやフィードバックの指導の必要性が示唆された。